

兩上様へ御獻上被成候趣被仰遣候故、左候へば御初意とは
 迥に別段の首尾故、御斷可被仰上と御決斷被成候。私共存
 寄も候はゞ可申進旨致承知候。指當御尤成御思案と奉存
 候。假令大地兄其表に被有合、從先生右の趣に被仰遣候て、
 甥舅の間柄にても、何の頓着も無之調可被上事とは不存
 候。必達御内聽、其上にて調可被上事に奉存候。但御斷を
 申儀には被及間敷事か。公家御聽届被遊候上、無用とは本
 より可被仰出様は無之事かと奉存候。况や貴兄御事に候へ
 ば、容易に御調可被成事とは不存候。貴兄御調不成候はで
 不叶儀にも候はゞ、可被達御聽事にも可有之候得共、左様
 の儀とも不被思召候旨被仰下候。是は從先生も、必貴兄御
 調被成候様に御頼と申筋にても無之候。右の首尾に候へ
 ば、於貴兄は御斷被成候儀當然と奉存候。但私にて御座候
 はゞ、又か様にては有之間敷かと奉存。其仔細は私儀は表
 御小姓の節、外交不仕御格の内より、御用は不及申私用共
 に申通、御使番に成候ては御近習に相詰候得共、先生への
 儀は御免にて、あなたへも勝手次第に罷越、御小屋へも御
 勝手次第に御越被成候様に被仰付候。か様の譯に付、少々

公邊御隱密事にかゝり候迄も御通達仕來候。但此儀は先
 生御近習役御勤不被成以前の事に候。此素志を以て御部屋
 栖の時分、當御代に至候ても御内聽に奉達候事共有之候。
 然ば萬一私相詰罷在候て、御頼被成候はゞ必奉達御聽候
 て、調上げ可申事と料簡仕候。夫とも何とぞ筆者の姓名も、
 必上聞に達候筋に候はゞ、様子により御斷可申上候。乍然
 筆者の儀可被仰上筋は無之筈と奉存候。避嫌の味は、強て
 此度の所には不預事かと奉存候。遠路態々預御下問候故愚
 意如此御座候。大地兄より申來候は、互に料簡申遣置、追
 て異同承合可申旨に付、如何被申入候や其段は不奉存候。
 追て承可申と存候。以上。

八月廿七夜

凌新漫書

克齋契兄

一、同上の儀小寺邊路より青地禮幹宛狀

九月廿六日書

駿臺雜話相調申儀御斷の存寄申上候處、以御別幅高意委曲
 被示下忝承知仕候。愚慮の趣、高意も尤に思召候旨、大地
 兄よりも御同意の趣に申來安堵仕候。右御別幅の内、貴丈
 の御身に被處候ては、違可申と思召候旨、就夫筆者の姓名

必達上聽申儀に候者、御斷も可被仰上候。乍然其段可被仰
 上候筋は無之旨、被思召候旨被仰下候。去る廿一日拜謁の
 節、右の趣御斷申上候へば、先生にも筆者の儀可被仰上儀
 にても無之候得共、存寄の趣も尤の旨被仰候。此儀は雖先
 生の御言、とくと領得難仕奉存候。若此冊子誰相調候やと
 御尋被遊候はゞ、其段不被仰上は成申間敷、左候へばこな
 たより不被仰上候ても、同事の儀と奉存候。私儀はか様の
 儀迄も慮申候て、御斷申上候事に御座候。御斷申上候趣は、
 先生にはとくと尤不被思召候御様子に候得共、其段は不
 及是非候。右雜話仁禮智信の四集拜讀了申候。仁禮兩集な
 ど別て切要成儀ども、扱々面白儀ども御座候。早速入御覽
 度儀と奉存候。